

聖書:テサロニケ人への手紙第二 1章1~7節

説教:神の国のために

はじめに

先週、大型の台風が関東や東北地方を襲い、家が流され、人が亡くなり、今も避難所に身を寄せている方々がいると聞いて、私たちも心を痛めます。このような災害が起きると誰もが考えます。どうしてこんなことが起こるのか。神は何をしているのか。また、これはだれもが経験したことがあるのではないかと思うのですが、少し調子が悪いので病院に行つて診てもらったら、いのちにかかわる病気であると医師から告げられて頭が真っ白になるということがあります。そして、なぜ家族がこんな病気に遭わなければならないのかと自問自答します。病気だけではありません。突然の事故に巻き込まれるということもあれば、信頼していた人に裏切られて人生をめちゃくちゃにされたという方もいます。最近では、小さな子どもたちが親や同居する家族から虐待を受けて死んでいくという事件も起きています。そのたびに考えます。神は私たちを愛しているというのであれば、なぜこんなひどいことが起きるのか。なぜ小さな子どもたちが苦しみ、死ななければならないのか。

この疑問は何も私たちだけではない。詩篇にも、「なぜですか。いつまでですか」と問い続けるそのような信仰者の祈りが記されています。聖書は、この疑問に関してどのように答えるのか。そんな視点で今日の箇所を見ていきたいと思ひます。

1 迫害の中で

1) 忍耐と信仰

パウロが二回目の伝道旅行の時に、ギリシャの町にあるテサロニケに立ち寄り、福音を語ったところ、それを聞いて多くの人たちが信じて、すぐにその町に立てられた教会、それがテサロニケ教会です。ところが町に住んでいるユダヤ人たちは、これをねたんで激しい迫害を加えてパウロを町から追い出してしまった。パウロがいなくなつてから、今度は教会の人々を迫害します。そのことを後になって知つたパウロは教会の事を心配して、手紙を出すのですが、なぜか二度出しています。最初の手紙を送つてからそれほど間を置かずに書いたのがこの手紙であると言われます。前の手紙で十分に言い尽くすことができなかつたことがあつたということですから、パウロが最も伝えたかつたこと

がこの二番目の手紙に集約されていると言えるかも知れません。

2) パウロの誇り

4節にこう書いています。「ですから私たち自身、神の諸教会の間であなたがたを誇りに思っています。あなたがたはあらゆる迫害と苦難に耐えながら、忍耐と信仰を保っています。」

「あらゆる迫害と苦難に耐えながら、忍耐と信仰を保っている。」そのことをパウロは誇りに思っているときえ書いていますから、この忍耐と信仰の二つのことはかなり大切なことのようにです。

私たちはどちらかと言えば忍耐はしたくありません。「私は何一つ苦しみがありません。いつもハッピーです」と言えればどんなに楽だろうかと思うのですが、そんな人に会つたことがない。どういふわけか、人生を長く生きれば着るほど忍耐がついて回つてきます。でもパウロが忍耐と信仰を一つのセットとして、誇りとさえ言い切るくらいですからこれは切り離せないもののようです。

2 苦しみの意味

1) 正しいさばきがある

私たちは苦しみとか忍耐と聞くと、頭に浮かぶのはマイナスのイメージです。苦しみに何か意味があるとか、ましてよい目的があるとは到底思えない。ですから世の人々は、お正月になると神社にお参りして「無病息災」を願うわけです。戦国時代の武将であつた山中鹿之助という人は、「私に苦しみを与えてください」と祈つたのだそうですが、これは例外中の例外と言うべきでしょう。

では、聖書はなんと云つているのか。5節。「それは、あなたがたを神の国にふさわしいものと認める、神の正しいさばきがあることの証拠です。あなたがたが苦しみを受けているのは、この神の国のためです。」

日本語訳では順番が逆になっていますが、元の文章の順番に従えば、「神の正しいさばきのあることの証拠です」が最初に置かれています。私たちが苦しみ会つていることが、神の正しいさばきのあることの証拠である。そう言われてもピンときません。

2) 神の国にふさわしい

そもそもこの証拠は、どのような目的に使われるのか。そのことはちゃんと書いてある。「あなたがたを神の国にふさわしいものと認めるために。」

私たちは信仰をいただいて、主イエスを信じたときから、天の御国に迎えられる約束をいただいています。この約束は目に見えませんが、ときどき疑問に思う。「私は本当に天国には入れるのだろうか。」何か証拠が欲しい。証拠があれば安心できるのだが。そう思っている方は多いのではないかと。安心して下さい。ちゃんと証拠があると書かれています。どんな証拠か。“あなたがたがもしも苦しみにあいながらも忍耐して信仰を保っているなら、それが天国にふさわしいものと認められる証拠です。”

でもこう言われても喜ぶ人はいないでしょう。しかし、わかることが一つだけある。苦しむことに意味などないのだと思い込んでいたけれど、苦しみにもきちんと意味がある。「神の正しいさばきが必ずあることの証拠である。」

正直に言えば、私はここを最初に読んだとき、苦しみに会うことがどうして証拠になるのか、すぐに理解できませんでした。証拠を見せてくれるというのなら、私たちが苦しまなくても済む方法で示してもらいたい。そのほうがずっとすっきりします。ところがなぜか、苦しみに会うことが証拠だと言われるのです。

3 正しいさばきをしてくださる神

1) もしもさばきがないのなら

この疑問についてはまた後で触れることにして、次に6, 7節を読みます。「神にとって正しいことは、あなたがたを苦しめる者には、報いとして苦しみを与え、苦しめられているあなたがたには、私たちとともに、報いとして安息を与えることです。このことは、主イエスが、燃える炎の中に、力ある御使いたちとともに天から現れるときに起こります。」

ひとつ前の5節には、「神の正しいさばきがあることの証拠です」とあり、6節で「神にとって正しいこととは」と続いています。神のさばきがあるのかないのか。神のさばきがあるのならば、そのさばきは正しいものであるのかどうか、このことが私たちの苦しみの意味を理解するために必要不可欠なことだと言っています。正しいさばきとは、苦しめられている者が必ず報いとして安息が与えられる。もっと言えば、神の国に迎えられていく。それが神のさばきである。

苦しむのはいやなことですが、でもなぜか私たちは、忍耐しながら信仰を保ち続けています。なぜでしょう。意識していたかどうかは別として、神のさばきがあることを知っているからです。だから目の前の現実から逃げず、向き合おうとしています。

もし仮に、神のさばきがないのとしたらどうでしょうか。あるいはあったとしても、不公平なさばきだというのならどうなるでしょう。そのことを考えるために二つの例を挙げたいと思います。

まず一つ目です。私が子どもの頃、テレビで鉄腕アトムというアニメを放送していました。今思い起こすと、あの時代は科学の力によって人類はすばらしい未来を切り開くことができる、そんな希望を誰もが抱いていたように思います。実際に家の中に蛍光灯がついたときは明るくて驚きました。ところがいまはどうでしょうか。家の中は明るくなったかも知れませんが、世界がますます暗くて悪い方向に向かっているのではないかと不安を感じて、未来に明るい希望を持つことが難しくなっている。希望が持てない世界で、子どもたちに「苦しくても未来を信じてがんばって生きなさい」とどのようにしたら言えるのでしょうか。神がこの世界を正しくさばかないというのなら、私たちはなんの望みもないということになります。

次に二つ目のことです。今回の災害でもそうですし、あるいは病気や事故ということで愛する方を亡くすこともあります。そんなとき平然としていられる人はいません。今回の台風で川の水があふれて寝室にまで流れ込んできたとき、高齢で足が不自由になったご主人をなんとか助けようとしたけれど助けられず、ご主人は水の底に沈んでいった。そのことを悲しんでいる奥様のことがニュースで報じられていました。このようなことはたくさんあったはずですが、いったいだれがこの奥様を慰めることができるでしょうか。いったいだれが、ご主人の死をうまく説明できるでしょうか。誰も答えられません。私たちは心の奥深くで、ずっと訴えています。なぜですか、どうしてですか。もし神が正しくさばかないというのなら、どこにも答えがない。私たちは空しく死んでいくしかない、実にあわれなはかない存在に過ぎないということになります。

2) イエス・キリストの忍耐と信仰

でも本当に神はさばきをなさるのでしょうか。その証拠は何かと問われたとき、パウロは答えます。あなたが今苦しみを受けていることが証拠で

す。その苦しみは、あなたがたがやがて神の国に迎えられることの証明書になる。

私たちは神のさばきがある証拠というときに、なにかもっと別の証拠を考えていました。苦しみの中で忍耐と信仰を保つことが証拠になると聞いて意外な印象を持つでしょう。なぜ苦しみという方法をとるのか。もっと別の方法はないのか。

でもよく考えると、苦しんだのは私たちだけだったのか。。イエス・キリストはどうだったのでしょうか。この方は十字架の苦しみを忍耐してくださいました。十字架の上で、この方は神として持つておられる権威も、権力も、奇蹟を起こされる能力も、そしていのちさえも捨ててくださいました。しかしただ一つ捨てなかったものがある。信仰です。父なる神が必ず正しくさばいてくださって、信じる者を死からよみがえらせてくださる。十字架の上で苦しむとき、忍耐しながら信仰を保ち続けてくださった。イエスが歩まれた後私達はたどっている。そのように考えるならば、納得いきません。

3) 世への証しとして

ずっと昔のことですが、こんな話を聞いたことがあります。「クリスチャンは世間では暗いと思われているのだから、世に証しするために私たちは暗い顔をしてはいけない。苦しんでいる姿を見せてはいけない。もっと明るく振る舞わなければならない。」ちょっと極端な言い方をしましたが、嘘ではなくて本当の話です。

聖書はなんと言っていますか。クリスチャンは明るく振る舞えとは言いません。そうではなくて、私たちは苦しみの中にあることをもっと前向きに受けとめてよい。苦しむことに積極的な意味がある。苦しみの中で忍耐し、信仰を守っていくのならば、それは世に対するすばらしい証しとなっていく。なぜなら、神がこの世界を正しくさばいてくださる、その証拠になるから。

二千年前、人となって私たちのところに来られた主イエスは、やがて力ある御使いたちを伴って再び天から現れるとき、完全なさばきを行ってくださる。その日が必ず来るのだという励ましを受けながら、私たちは目の前にある苦しみの中を忍耐をもって歩んでまいります。